

2:1 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。 2:2 それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。 2:3 そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。 2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。 2:5 神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。 2:6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。 2:7 そのあかしのために、私は宣伝者また使徒に任じられ——私は真実を言っており、うそは言いません——信仰と真理を異邦人に教える教師とされました。

### はじめに

今日初めて来られた方のために、テモテへの手紙第一からこれまでに学んだことを要約してお話しましょう。

パウロは、テモテという教会の若い長老に大切な手紙を書き送りました。

彼は、エペソの教会の指導者でした。

この手紙が書かれたのは、紀元 63-64 年ごろです。

これまでの学びの主要ポイントは次のとおりです。

1. パウロは、テモテが教会における偽りの教えに対処することを求めました。その中で、ふたつの偽りの教えを指摘しました。そのふたつとは、「グノーシス思想」と、神の律法である十戒の誤った解釈に基づく「律法主義の教え」でした。
2. パウロは、偽りの教えが教会に入り込むと、教会内に不和が起こり、人々が真の信仰から迷い出る、とテモテに教えました。  
その時のメッセージを聞いておられた方は、昔私が英国のダートムーアの沼地を歩いたことをたとえとしてお話したのを覚えておられるかもしれません。スタート地点から方位磁針がたった 1 度ずれただけで、目的地に到着することはできません。ほんの少しの偽りの教えでも、間違った方向に人を引きずり込むのにじゅうぶんです。
3. 偽りの教えを正すのに必要なものが何かについても学びました。  
パウロは、正真正銘の福音に改めて焦点を絞ることと、自らのきよめに専心することをテモテに命じました。テモテがこのふたつを実践することで、クリスチャン人生における成長や発展に寄与する事柄に教会の人々の目を向けることができます。
4. 先週の学びでは、律法に関する偽りの教えに正しい律法の理解をもって対抗することをパウロが望んでいたことがわかりました。パウロは、律法が与えられたおもな目的は罪を表面化することだと語りました。律法は、イエスを指し示す教師だと呼ばれることがあります。  
また、それ以外にも神の律法に目的があることを学びました。  
ひとつは、社会の悪を抑制することです。一例として、英国のアルフレッド大王の話をしました。彼は、十戒を基に英国の法律を形成しました。近年までは、英国の法律の大半は、神の律法や聖書の真理を根拠としていました。  
さらに、神の律法は、信徒たちの恵みにおける成長を助ける働きがありました。律法を信仰の成長の指標として用いるのです。
5. 偽りの教えは、福音の力を台無しにすることも学びました。

6. 次に、パウロは自身の救いの体験は、それ以降に救われる人々の模範となると語りました。それはまず、イエス・キリストがすべての主導者であることです。イエスがパウロの心に最初に語り掛けてくださいました。  
次に、パウロは、無知であったために罪を犯しましたが、それでも自身の罪について正直でした。  
最後に、パウロはイエス・キリストのあふれる恵みについて改めて語ります。  
先週、滝が滝壺に注ぎ込む様子をとりえた写真をスライドでご覧いただきました。  
それは、イスラエルのヨルダン川の源流で撮った写真です。
7. 最後に、パウロは教会が守りを必要としており、偽りの教えは迅速に、効果的に、愛をもって対処されなければならないと語りました。

これらの事柄を念頭に、今日の学びを進めていきましょう。

## 導入

今日の個所から、この手紙の新たな部分に入ります。

新たな部分は2章1節から3章13節までです。

今日の個所に入る前に、この部分の大まかな構成を見ておくとよいでしょう。

パウロは、偽りの教師に関するおしへの比喻として破船を用いました。そして、何をすべきかを語りました。

船は、暗礁に乗り上げることなく、水深の十分ある個所を航行するよう舵取りをしなくてはなりません。

つまり、乗組員の行為に対処する必要があります。

すでに、ふたりの乗組員は追放されました。(1:20) 船を操縦する新たな指導者たちの任命に導きが必要です。

今日の個所では、暗礁に乗り上げることなく、水深の十分ある個所を航行する方法を学びます。

どの訳の聖書を使っているかによりますが、今日の個所を読むと、文章の構成がわかるでしょう。パウロは、「すべて」という単語を4回使っています。

2:1-2には、すべての人のために祈るようにという勧めがあります。3-4節からは、すべての人が救われることを神が望んでおられることがわかります。そして、5-6節には、イエス・キリストがすべての人の贖いの代価として死なれたとあります。7節には、すべての国の人々への宣教が記されています。

今日は、このあらましに沿って、聖書がこの個所で教えていることを明らかにしていきます。

### 1. 祈りが何より大切。(1-2節)

パウロは1-2節で、祈りが何より大切であると語ります。そして、どのように祈るべきか、誰のために祈るべきかを示します。彼は、さまざまな祈りについて触れています。これらは似てはいますが、その微妙な意味の違いが、祈りについての私たちの理解を豊かにしてくれます。

ギリシャ語で書かれた原語の新約聖書を読むことができれば、あらゆる祈りの違いは明白でしょう。

ここでは、これらのギリシャ語の単語が示す4種類の祈りについて手短にお話します。

- a) 必要性を感じて湧き上がる祈り。自分に欠けているものを自覚し、その必要を満たしてくださいるように神に叫び求める祈りです。(ギリシャ語「deesis」不足する、の意。)
- b) 失われた人々のたましいのために神に向けられた祈り。(ギリシャ語「proseuche」祈り、の意。)

c) 他の人の必要のために祈る祈り。誰かのために代わって神に祈ることで、その人の人生に関わります。その人の痛みを感じ取り、神に助けを求めます。（ギリシャ語「enteuxis」誰かの代弁をする、の意。）

d) 感謝の心で祈る祈り。

パウロは、すべての人に対する重荷を負っていました。このような様々な祈りは、私たちがひざまずいて行う伝道活動です。これこそ本当の働きであり、非常に骨の折れる働きです。では、パウロはどのように祈るようにと教えているでしょう。

あらゆる方法で祈るようにと語ります。パウロは、私たちが多くのたましいを思いやり、神への感謝と畏れをもって、その人々に代わって助けを求めることを望んでいます。

次にパウロは、誰のために祈るべきかを語ります。

まず王とすべての高い地位にある人たちのために祈らなければならない、というのは意外だと思われるでしょうか。

パウロは、神を世々の王と呼びます。（1：17）

また、王の王、主の主と呼びます。（6：15）

ですから、安倍首相のために祈るのは、時間の無駄ではありません。

私たち自身が安倍首相に一票を投じていなくても、神はご自身のみこころのために、安倍首相さえも用いることができになります。

2 節で、パウロはイエス・キリストを信じる信徒たちが敬虔に威厳をもって平安で静かな一生を過ごせることを願っています。

当時、ローマ帝国では暴君ネロの治世で、多くのクリスチャンが迫害を受け、殺されていました。

ですから、パウロの祈りのリストの一番目にこの祈りが挙げられたのも当然です。

現在でも、世界中で無数のクリスチャンがイエスを信仰しているというだけの理由で殺されています。そのようなことが起こっているのは、王や統治者たちがそれを許しているからです。

そのすべてではありませんが、大半は過激派イスラム教徒によるものです。

クリスチャンが平安に暮らせる唯一の道は、その国の法律と主権者によって守られることです。

私たちは毎週、日本政府のために祈るべきです。

パウロは、教会の人々が敬虔に生きるよう祈ることを求めています。

これも大切な祈りです。教会の人々が悪事を行うことほど教会にダメージを与えるものではありません。

近年では、カトリック教会で起こった男子児童に対する長年にわたる性的虐待が明るみに出ました。しかし、これはカトリック教会だけの問題ではありません。他の教会でもこのような問題があります。

教会外部の人々の敬意を得るには、イエスを信じる信徒たちが敬虔に威厳をもって生きる必要があります。

最後に、パウロは 1 節で私たちがすべての人のために祈ることを望んでいるとあります。これは性別を問わずにすべての人です。

ユダヤ人歌手のニール・ダイヤモンドは、救いをテーマにした歌を書きました。その楽曲はライブアルバム **Hot August Night** の中に収録されています。

その歌詞には、「赤ちゃんを抱っこして おばあちゃんを引っ張って みんな行く 兄弟愛が示す」

私たちの祈りから誰も漏れてはいけません。

## 2. 神の愛という土台 (3-4 節)

3-4 節では、私たちの祈りはすべて神の愛が土台であることを示します。私たちが祈るのは、神がすべての人を愛しておられ、すべての人が救われることを願っておられるからです。

パウロは、すべての人が救われるようにと祈ることは、神の御目に受け入れられる良いことだと語ります。

誰かのために、その人が神の愛を直接体験して知るようにと祈るのは、神のみこころにそったことです。

テモテ第一には、良いことに関する言及が多々あります。

神の律法は良い。(1:8)

神の創造された世界は良い。(4:4)

実践的な奉仕に現れる敬虔な生き方は良い。(5:10)

では、私たちの救い主なる神は何をお望みなのでしょうか。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。

パウロは1章15節で、イエス・キリストがこの世に来られたのは、罪人を救うためだと語りました。

神の愛という土台が、イエス・キリストにあります。神によって遣わされ、この世に赤ちゃんの姿で来られ、人として育ち、完全に人であると同時に完全に神であられたお方です。

主は、ご自身の神性をあらゆる奇跡をとおして証明なさいました。

主は、大自然にも、病や死にも勝る力をお持ちでした。

そして、少年が持っていた少ないお弁当を用いて、5,000人に食べさせることがおできになりました。

これは、歴史上もっとも信憑性の高い正確な当時の記録、新約聖書に記されています。

神の愛を否定することはできません。聖書をとおして誰もが読むことができ、イエス・キリストを信じる本物の信徒に宿る愛をとおして体験することができます。

本物の信徒たちは、神の愛を人類に示す神の器です。

### 3. イエス・キリストの死の意味 (5-6 節)

3年ほど前、若い日本人女性が英国の友人宅で夏の短期ホームステイをしました。その女性は、私にとっても良い質問をしてこられました。

彼女はこう尋ねてきました。「アリストテア牧師、なぜイエス・キリストは十字架にかかって死ななければならなかったのですか。」

彼女は真剣でした。キリスト教の伝える内容を、自分自身の中で理解しようとしていました。

その時の私の答えは、いつでも誰にでもお伝えすることと同じです。

この5-6節がその答えです。

2:5 神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。2:6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。

日本では、自分のお願い事をするために多くの人が神社仏閣を訪れます。

大学受験に受かりたい若者は学業の神様に向かって祈願し、子どもがほしいのになかなかできない夫婦は子授けの神に子宝祈願をします。

これは、パウロがテモテに手紙を書いた当時のエペソの状態そのものでした。

だからこそ、パウロはここで最初に、「神は唯一です」と語っているのです。

実際には聖なる神はこの世にひとりしかおられない、その神がすべてを創造された、私たちが神に似せて造られた、ということに気づけば、「ではどうすればその神を知ることができるのだろう」という疑問にたどり着くでしょう。

パウロは、唯一の仲介者をとおして神を知ると語ります。聖なる創造主である神と人との仲介者はただおひとりだと言います。

日本人または日本の文化を理解している人は、仲介者の重要性がわかるでしょう。重要人物に紹介してもらおうとか、誰かに何かを依頼したいときに、日本では紹介してくれる人が大事です。欧米ではそれほどでもありませんが、それでも、「ビジネスでも日常生活でも、何を知っているかではなく誰を知っているかが重要だ」と言われます。

ですから、ある程度はどこの社会でも、何らかの益をはかるために重要人物を紹介してくれる人がいるわけです。

イエス・キリストは、創造主なる神を私たちに紹介してくれるお方です。

他には誰もいません。

では、なぜこの聖なる創造主、神に紹介してもらう必要があるのでしょうか。

その答えは簡単です。

神は、この世の最初の人間ふたりを造られました。男はアダムという名でした。神はアダムの助け手として女のエバも造られました。

このふたりは、神と一対一の絆を築くために造られました。

アダムとエバは、神との良い関係を保ち、すべてにおいて完璧な世界で幸せに暮らしていました。

彼らの体は、永遠に生きるように造られていました。老いや病気もありません。

ふたりに必要なものはすべて与えられていました。

ふたりには、たったひとつだけ禁止されていることがありました。それは、善悪の知識の木の実を食べてはいけないというものでした。

神は、もし食べたならふたりは死ぬとおっしゃいました。

それは、体と霊の死を意味します。

体が死ぬことと、神との関係が死ぬということです。

残念ながら、ふたりは蛇になりすました墮天使サタン誘惑に屈してしまい、神の言いつけを破って、善悪の知識の木の実を食べてしまいました。

その結果、アダムとエバとその子孫は呪われ、全世界までもが呪われました。

けれども、神はいつの日か「救い主」を送って、人類を救い、サタンを裁くと約束してくださいました。

その救い主は、神のひとり子イエス・キリストという人の姿で来られました。

人類の問題は、罪が裁かれなければならないことでした。人は、聖なる神から引き離された状態でした。

この罪に対する罰から人類を解き放つには、誰かが身代わりになって人類の罰を受けなくてはなりません。

イエス・キリストがすべての人の贖いの代価としてご自身をお与えになったと 6 節が語るのは、そういうわけです。

贖いの代価とは、囚われた人を解放するために支払うお金、つまり身代金です。

誘拐犯は、人質を解放してほしいければ金を出せと身代金を要求してきます。

これが、イエス・キリストが十字架にかかって死ななければならなかった理由です。イエスは、身代金になられたのです。それは、私たちが永遠の罰を免れて、創造主なる神と正しい関係を取り戻せるようになるためです。

けれども現代人は、真実よりもうそを信じることを選びます。

この真実が心に届いて信じれば、私たちは自由になります。そして、イエスのおかげで創造主との関係を取り戻すことができます。

最後に 7 節です。パウロはここで、このすばらしい福音を異邦人に伝えるために彼は召されたと語ります。異邦人とはつまり私たちです。

パウロはテモテがこの働きを継続することを望みました。そして今、私たちがその働きを継承することを神はお望みです。

#### **4. 福音の真理は、宣べ伝えられなければならない。(7 節)**

クリスチャンが貧しい人に施すのは素晴らしいことです。また、クリスチャンが病人を見舞うのも素晴らしいことです。地震や台風などの自然災害の後に、災害支援活動にクリスチャンが参加するのも素晴らしいことです。

けれども、会話やトラクトなど何らかのかたちでイエス・キリストの福音が宣べ伝えられていないなら、それはチャンスを逸していることになります。

誰かの役に立っているのだから、時間の無駄だとは言いません。

けれども、そのような活動は誰もができることです。一方、人のたましいを救えるのはイエスだけです。

だからこそ、私たちはイエスについて人々に語り、福音を伝えなければならないのです。

今からお話するのは米国ニューヨークでのお話です。

ある劇場で大火災が起きました。非常用扉はすべて、セキュリティ強化のために施錠されていました。

ひとりの男性が、劇場の屋上部分に出られる秘密の階段があることを思い出しました。

すぐさま、その階段を上って屋上に到着しました。

劇場と隣のビルは日本のように密接した状態だったので、男性は隣のビルの屋上に飛び移りました。

足に軽傷を負いましたが、無事逃げることができました。

一週間後、警察官がその男性の入院する精神科病棟を訪れました。彼は完全なうつ状態でした。

警察官はその理由がわかりませんでした。

警察官は言いました。「300人が犠牲になった火災で、あなたは奇跡的に助かったのに、どうしてそんなに落ち込んでいるのですか。」

男性は警察官をじっと見つめました。彼の目からは涙が流れています。彼は言いました。

「自分だけが助かったから落ち込んでいるのです。脱出できる道があるとみんなに教えてあげることができたはずなのに、そうしなかったからです。」

あなたはクリスチャンですか。イエスを自らの救い主として受け入れ、愛していますか。もしそうなら、あなたはイエスだけが脱出の道だとわかっているはずです。どうか、イエスのことを周囲の人に伝えてください。

そんな話は聞きたくないと怒る人もいるかもしれません。話を聞いてくれない人もいるでしょう。馬鹿にされるかもしれません。けれども、救われて永遠を天国で過ごしたいと思う人もいるはずです。

そのひとりのためだけでも、伝える価値が十分にあります。私には十分価値がありました。

神が私たちを助けてくださって、イエスのことを周囲の人たちに伝えることができますように。アーメン。